

Vol.19
2023年
春夏秋冬

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
(CEL 弘本由香里、B-train 橋本護・小倉昌美)
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

発行：大阪ガスネットワーク エネルギ―文化研究所 (CEL)
※U-CoRo=ゆーこー (上町台地コミュニケーション・ルーム)
問合せ先：tel.06-6205-3518 (担当：CEL 弘本)

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす「上町台地」。古代から今日まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がっています。自然の恵みとリスクのとりえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方……。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作いたします。

古代の民俗生活の実感的把握で 日本文化研究に新境地を開いた 折口信夫 (釋道空)

(おろちしのぶ、1887-1953)
民俗学者、国文学者、また釋道空(しゃくちょうくう)と号した歌人、詩人でもあった。その学問的成果は、国文学、民俗学をはじめ神道学、芸能史などの多方面にわたるもので、調査資料や文献を「実感的に把握すること」に根差した独自の研究は「折口学」とも称された。特に民俗学では、「まれびと」や「よりしろ」などの創始的な概念を構築し、柳田國男と共に日本民俗学の基礎を築いた。



国文学と民俗学を独自の感性で結びつけ、過去と現在をつなぐ古代学を切り開いた折口信夫(釋道空)。短歌や小説等の創作者としても異彩を放ちました。世界が揺れた19世紀末から20世紀にかけて、文化の基層を探究し続けた意気地。折口学とも称される、コスモロジーの原点は、大阪・上町台地にありまじろ。聖俗、貴賤、新旧；、異なるもの、流れるものを受け入れる、「野生」を帯びたまちのありようが、少年の魂を耕したのです。その軌跡をたどることは、都市・大阪の再評価につながってゆきます。

かの国文・民俗学者にして歌人 折口信夫 釋道空を生んだ 野生の都市・大阪と 上町台地をゆく

釋道空の大阪詠でたどる ふるさとのおまの情景



折口信夫(釋道空)が大阪について詠んだ歌の中で、「春のことぶれ(釋道空 1930年)の大阪詠」に挙げられている歌は、思い出せる情景を詠んだものが多い。折口信夫40代、「大阪」と言われた時代の作風独特の句読点や一字空け、分ちか書きとも相まって、彼のふるさと大阪への思いが伝わって来ます。

折口信夫年譜

- 1887年 (明治20) 2月11日 西成郡木津村に父秀太郎(医業)、母こうの四男として生まれる。
- 1890年 木津幼稚園に通う。
- 1892年 木津尋常小学校に入学。
- 1896年 南区竹屋町、育英高等小学校に入学。
- 1899年 大阪府立第五中学校(後の天王寺中学)入学。(12歳) 同級生には武田祐吉(国文学者)、岩橋小弥太(国史学者)、西田直二郎(国史学者)がいた。
- 1900年 大和飛鳥坐神社を訪れ、仏教改革運動家・藤無染と出会い「道空(愛称)と呼ばれる(高岡多恵子説)。金尾文淵堂で薄田泣菫『暮笛集』購入。
- 1901年 父親から『万葉集略解』を買ってもらう。
- 1902年 『文庫』『新小説』に投稿した短歌各一首入選。成績が下がる。暮れに自殺未遂。
- 1903年 天王寺で第五回国内勧業博覧会。
- 1904年 日露戦争始まる。
- 1907年 (17歳) 卒業試験にて4科目で落第点を取る。大和に3度旅行し、若き日の釈道空に共感。
- 1905年 (18歳) 3月 天王寺中学校を卒業する。医学を学ばせたい家族の勧めに従って三高を受験の出願前夜に進路を変えて上京、新設の國學院大学の予科に入学。
- 1907年 (20歳) 國學院予科修了、本科国文科に進む。国学者三矢重松に教えを受け強い影響を受ける。根岸短歌会に入会する。
- 1910年 (23歳) 7月 國學院大學国文科を卒業。帰阪。この頃から釋道空の筆名を使い始める。
- 1911年 10月 大阪府立今宮中学校の嘱託教員。
- 1912年 伊勢、熊野の旅に出る。
- 1913年 「三郷巻談」を柳田國男主宰の『郷土研究』に発表、以後、柳田の知遇を得る。
- 1914年 3月 今宮中学校を退職し、上京。
- 1916年 國學院大學内に郷土研究会を創設。
- 1917年 「アララギ」同人。小説『身毒丸』発表。
- 1919年 國學院大學臨時代理講師。『万葉辞典』刊行。
- 1921年 最初の沖繩・喜岐旅行。
- 1922年 國學院大學教授となる。
- 1923年 慶應義塾大学文学部講師。関東大震災。
- 1924年 「アララギ」を去り、北原白秋らと歌誌『日光』(37歳)を創刊。
- 1925年 小説『歌集』『海やまのあひだ』を刊行。
- 1928年 慶應義塾大学文学部教授。芸能史を開講。
- 1929年 『古代研究』刊行開始。
- 1930年 歌集『春のことぶれ』を刊行。
- 1939年 小説『死者の書』を発表。
- 1940年 國學院大學学術講座に「民俗学」新設。
- 1941年 太平洋戦争始まる。
- 1944年 藤井春洋、硫黄島に着任。春洋を養嗣子入籍。
- 1945年 3月 大阪の生家が戦災により焼失。
- 1949年 7月 能登一宮に春洋との父子墓を建立。
- 1950年 宮中御歌会選者となる。
- 1953年 9月3日 胃癌により永眠。享年66歳。



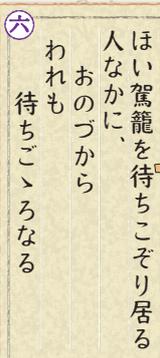
千日前
おのれまづ
たはれ遊びし
をこの笑ひは、
人忘れけむ

合邦閣魔堂
あやしき闇と光
晦日夜の
燈 檜つ 堂の隈。
目のこりつ、
現実なりけむ

常世の国と西方浄土
西門はたそがれて
風吹きにけり。
経木書かむ
と言ふ人あり



四天王寺
幼な心に響く出来事
ほい駕籠を待ちこそり居る
人なかに、
おのづから
われも
待ちごころなる



十日戎
「ほい駕籠を見にという記憶が消えない」という折口「ほい駕籠」は、芸者衆を正すための「重宝」のことで、正月明けに今宮戎神社の十日戎には、ホエ工コボイの掛け声のもと参拝が訪れた。

舎利寺 古代の道を逍遙する
四小橋過ぎ
鶴橋 生野来る道は
古道
と思ふ 見覚えのなき

“野生”の都市・大阪と折口信夫

田野 登さん(大阪民俗研究会代表) 談

都会性と野性が複合する大阪の可能性は？
ボクの祖父は、折口信夫とちょうど同じ時代に生き、折口が東京に出た後も、大阪の周縁部で細々と暮らしていました。自分にとっての祖父という存在に思いを馳せながら、折口の大阪に関する言説、大阪は「野性を帯びた都会」であるという主張に大きな共感を覚えています。
1918(大正7)年、雑誌「アララギ」に折口の「茂吉への手紙」が掲載されました。これは、斎藤茂吉に対して和歌における「ますらをぶり」の運動に、大阪人である折口が果たすることができる可能性を語ったものでした。
まず、折口は、東北出身の茂吉には「力の藝術家」として「田舎に生まれ育ったことは非常な祝福だ」と述べたうえで、自らの故郷・大阪については東京の洗練された都会とは大きく異なる地だと主張します。大阪は、二代目、三代目が家が絶え、つねに新興の気分を保ち続けており、「野性を帯びた都會生活洗練される趣味を持ち続け、そのために「比較的野性の多い大阪人が、都會文藝を作り上げる可能性を多く持つてゐるかも知れません」と、大阪人による「都會文藝」の可能性を主張します。大阪という都会は「江戸の通に對して、あまりやば過ぎる」ように、洗練されない泥臭い都会にこそ期待していたようです。

芸能者に向けられた特異なまなざし
大阪の野性の「発見」は、少年折口を育んだ大阪南郊を行き交う、実にさまざまな境遇や階層の人々、細民の姿に對してでした。流浪する田楽法師を題材にした折口の小説「身毒丸」にも、折口自身の少年期の体験が生かされているようですが、折口自身、子どもの頃から慣れ親しんだ、門付芸人、大道芸人たちの存在がそうです。
節季に訪れる放浪芸人が「零落した神だ」と幻視する「まれびと論」を唱えた折口信夫。都會周辺に生きた芸能者に向けた彼のまなざしには、賤視とともに畏敬の念が相殺されていたのではありません。

※大阪民俗研究会は、<http://folklore-osaka.org>
※1 折口信夫(1887-1953) ※3 「ますらおぶり」は、万葉集に見られる男性的でおおらかな歌風で、質実寛厚から和歌の理想と考えた。古今集以後の「たのおやめぶり」に対する言葉。さらに明治折口の生まれ育った木津からすれば反対の大阪北郊だが、ともにかつての近郊農村で、中心に対する周縁部としての共通点を持つ。
※2 『折口信夫 茂吉へ一巻の手紙』(アララギ 第十一巻 第六號)1918・大正7年6月
※4 折口は学校への通学路として「江戸時代以来の貧窮街長町東(『自選年譜』を通過する中で、とても様々な階層の人たちの暮らしを目にしていた。



浪速区の鴨町公園にある折口信夫生誕の地碑

※参考文献：『歌の手紙』折口信夫持田敏子、幻戯書房2016 / 『釋道空ノート』高岡多恵子、岩波書店2000 / 『若き折口信夫』中村浩、中央公論社1972ほか

少年を魅了した風土から折口学へ

幼時に父から和歌や俳句を口伝てに学び、小学生時代にはお遣いのお駄賃を握って道頓堀や千日前の芝居に夢中になり、思春期には心斎橋の書店・文芸サロンに足しげく通って近代詩歌に心ときめかせた折口少年。6年間通学した旧制天王寺中学校は、自宅から東へ約2キロ、途上に連なる風景は、折口少年を魅了してやみませんでした。台地の上から西の海・東の山の彼方へ、足下で営まれる人々の暮らしの奥底へ、まなざしを誘い、折口学の種を宿したのです。



出典:国立国会図書館「近代日本人の肖像」から

かの国文・民俗学者にして歌人、折口信夫=釋超空を生んだ“野生”の都市・大阪と上町台地をゆく

①「古代研究」

折口の古代学の代表的著作が『古代研究』(1929・30/昭和4・5年刊)。古代の生活から日本人の宗教観や国文学および芸能の発生を多角的に体系づけようとした試みで、国文学篇1巻、民俗学篇2巻からなる。折口は、柳田國男が論じた祖霊信仰とは異なる観点から、「まれびと」や「世界・常世」という独自の概念を提唱し、日本文化研究に大きな足跡を残した。

②「まれびと」

「まれびと」は、時を定めて世界から来訪する霊的な存在、あるいは神の本質的な存在であるという、折口の思想体系上で重要な概念の一つ。毎年「常世(とよよ)」からやって来て人々に幸福をもたらす来訪神として、日本人の信仰や世界の観念を探るための手がかりとして重視される。

上町台地と折口信夫の原風景

少年折口信夫が歩いた跡を訪ねて
高橋俊郎さん(オダサク倶楽部代表) 談

大阪は、折口信夫が旧制中学を卒業するまで過ごした故郷だということ、地元でもあまり知られていないのが実情です。私はかつて市立図書館に勤めていた頃から、少しずつ若き折口が歩いた跡を訪ねるようになりました。

折口は、現在の浪速区に生まれ、育英高等学校、さらに府立第五中学・天王寺中学に通いました。その通学路については、折口自身も「江戸時代以来の貧窮街、長町裏・又は合邦ヶ辻、家隆塚と任へる夕陽ヶ丘、勝院院・巫子町を」通ったと「自選年譜」の1899(明治32)年の項に記しています。大阪のまち中では当時堀川が多かったので、行き最距離は、自宅から新堀割や高津入堀川の橋を渡って口縄坂を上るコースになります。帰りは、夕陽丘の家隆塚から2(今)行き、四天王寺から逢坂を下り、合邦ヶ辻に立ち寄りたなかで、若き折口にとって、特に印象的だった光景があったようです。それは、上町台地の西方に陽が沈む荘厳なる光の風景で、私には、これが彼の思想形成にも大きく影響しているのではないかと考えます。

折口の唱えた概念のうち、主なものに「山中の世界」と「西方の常世」の二つがあります。両者共に沈む夕陽と関係するイメージでした。前者は小説『死者の書』(4)にも描かれた山越阿弥陀や當麻曼茶羅に、後者は西の海の彼方にある世界「常世」に、それぞれつながる考え方でした。

「四天王寺の西門は、極楽浄土東門に向かう故に、(中略)目指す浄土とは、やはり常世の形を変えたものに過ぎなかったのである。」(『国文学の発生 第三稿』)と、折口は、浄土と常世の同一性について語っています*3。

※オダサク倶楽部の活動については、facebook.com/OdaSakunosuke

*1 中世以来、夕陽丘 *2 家隆塚は「新古今」 *3 高橋俊郎氏は、折口近は、西の海に沈む夕陽と和歌集の選者の一人である信夫と同様に司馬遼太郎を拝んで西方浄土への極、藤原定家と並び称す(1923~1996)についても、楽住生を求める、「日想観」れる鎌倉時代初期の歌人、上町台地から見た夕陽の修行場。特に四天王 藤原家隆(1158 ~ 1237) 光景が、作品世界に大きく寺の西門は西方浄土の東、嘉祥2(1236)年に 影響しているのではないかと門に相当すると考えられ、地に夕陽庵を設けて、また、上町台地で生春秋の彼岸の頃に夕陽「日想観」を修めて往生し、まれびと織田作之助の作品にも通底する部分があるのではないかと感じている。

★織田作之助と台地の原風景

織田作之助(1913~1947)も上町台地の坂上からの夕景を見ていた。上町台地の生玉前町で生まれ育った彼は、高津中学には、台地の下にあった姉の家から通ったという。作品『木の都』の記述の中で、口縄坂を「登り詰めた高台が夕陽丘とよばれ、その境界の町が夕陽丘であることの方に、淡い青春の想いが傾いた。(中略)昔の高台からは西を望めば、浪華の海に夕陽の落ちるのが眺められたのであらう」と、かつての夕陽丘の光景に想いを馳せている。

金尾文淵堂

心斎橋筋の書店。文芸雑誌を出し、青年たちのサロンの観を呈した。



生國魂神社境内に立つ織田作之助像

折口は大正2年秋から半年間、当時の東区南農人町1丁目(現在は南大江小学校地帯北隅)に居住。当時四天王寺西門まで通じていた市電を使い今宮中学に通学した。

育英高等学校

地元の木津尋常小学校を卒業後、折口は竹屋町の育英高等学校に入学。

道頓堀

折口は小学生の頃、お使いの傭りに、芝居小屋に寄りたり文案の人物芝居を見ることを覚えた。

千日前

折口は小学生の頃、お使いの傭りに、芝居小屋に寄りたり文案の人物芝居を見ることを覚えた。

生國魂神社

生國魂神社境内には近松門左衛門を祀る淨理禪神社や并原西鶴像がある。

司馬遼太郎の推定通学路(最短コース)

折口や織田作之助が上り下りした坂道。

口縄坂

折口は文案や歌舞伎の「摂州合邦辻」の舞台となっている間廬堂にはしばしば立ち寄った。

家隆塚

折口は文案や歌舞伎の「摂州合邦辻」の舞台となっている間廬堂にはしばしば立ち寄った。

合邦閣廬堂

折口は文案や歌舞伎の「摂州合邦辻」の舞台となっている間廬堂にはしばしば立ち寄った。

一心寺

折口は文案や歌舞伎の「摂州合邦辻」の舞台となっている間廬堂にはしばしば立ち寄った。

四天王寺

折口は文案や歌舞伎の「摂州合邦辻」の舞台となっている間廬堂にはしばしば立ち寄った。

天王寺中学校

折口は文案や歌舞伎の「摂州合邦辻」の舞台となっている間廬堂にはしばしば立ち寄った。

大阪外国語学校

折口は文案や歌舞伎の「摂州合邦辻」の舞台となっている間廬堂にはしばしば立ち寄った。

折口学の世界

折口は文案や歌舞伎の「摂州合邦辻」の舞台となっている間廬堂にはしばしば立ち寄った。

万葉代記を著した天神 契沖墓

折口学の世界

③小説「身毒丸」

「身毒丸」は、折口信夫の小説。初出は「みづほ」(1917・大正6年)。高安長者伝説の俊徳丸の物語に触発されて書かれた作品。田樂法師の身、身毒丸(しんとくまる)の業簿におかされながらの流浪の暮らしと古代芸能のあり方を描いた。

折口学の世界

④小説「死者の書」

當麻寺に伝わる當麻曼茶羅羅刹・中將姫伝説に想を得て書かれたもの。1943(昭和18)年に青磁社から雑誌掲載版(初出1939・昭和14年「日本評論」誌)を増補校訂して出版。闇の中で目覚めた死者、遊覧彦彦(大津皇子)と彼が恋う耳刀自の物語を聞かされた藤原家隆の娘・郎女との2つの魂の神秘的な交感を描く、折口の代表的小説。

折口学の世界

折口学の源泉は古代との交歓

折口信夫は神の声を聴く耳を持っていた? @舎利寺 北辻 稔さん(ブログ「MY古史探検」主宰) 談

羽曳野にある私の住まいの近くから二上山*1が真正面に見えます。小さいころから親しんできた山で、大和から見るとは逆で、左側の高い方の雄岳です。折口の小説『死者の書』④の舞台のひとつがこの二上山。今から1300年以上前、非業の死を遂げた大津皇子*2が二上山の雄岳に埋葬され、その棺の中から聞こえて来る、愛しい耳刀自を想う切々たる悔恨の叫び、また刀自姫が運来で曼茶羅を織り上げるまでの當座での暮らしが非常に具体的に描かれていることに驚かされます。古代人の死者や魂に対する考え、生活の随所にある恐れや信仰の深さなどが迫真性をもって描かれて、読み進んでいくと、時折、大津皇子が眠る石棺から「うー ころー」と呼ぶ声が聞こえてきそう。折口信夫の学問は「美惑の古代学」とも称されました*1。私自身も羽曳野丘陵に登り、生駒山から二上山、古市古墳群や河内平野を眺めた時には、足元に日本を歩いていた歴史の舞台があるではないかと、実感します。住まいと地続きの河内や大和、葛城などを歩き回って、自分なりに古代史を描いてみたいとブログを立ち上げました。とことん歩き回ることによって、歴史書を超える想念が湧いてきて、古代史を現実的にイメージできる、そんな体験を積み重ねています。河内の柏原から寝屋川辺りまで歩きましたが、「生駒西麓」は古代から靈性がみなぎる地で、俊徳丸や江口の君、高安の女など、中世・近世を通じて様々な説話や物語を生み出す精神的エネルギー源でもありました。あるいは、折口信夫が求めた「魂のふるさと」の淵源のひとつでもあったのかもかもしれません。古代人と同じ風景を見、生活した場において、古代人が考え、感じたとしたことを自分のイメージの中で再構築しようとする。ある意味、境界を行き来することができるイメージ力が「折口学」の要だと思います。折口は神の声を聴くことができる耳を持っていたのかもしれない。 *詳しくは、ブログ「MY古史探検」https://minokita.xsrv.jp を参照。

*1 二上山は、雄岳(517m)と雌岳(474.2m)の二つの峰からなる。 *2 大津皇子は、天武天皇の皇子。母は持統天皇の姉の大田皇女。奈良と大阪の境(奈良県葛城市、大阪府太子町)にある山で、雄岳、大政大臣にも任じられたが、天武天皇の死後に逆心ありとて死を賜った。「續風土記」万葉集に各4首の漢詩、和歌が収められている。

金尾文淵堂と若き折口信夫

折口信夫は、中学生になって、心斎橋筋の小さな本屋、金尾文淵堂にもよく立ち寄っていたという(『経歴一通』)。金尾は、もとは仏教書専門店だったが、金尾種次郎が後を継いだ後は、文芸雑誌を発行し、文学を志す若者が集まる文芸サロンにもなっていた。当時、金尾は薄田泣菫の処女詩集『春笛集』を発行。折口少年が初めて自分の小遣いで買ったのが泣菫のこの詩集だったという。薄田泣菫編集の雑誌「小天地」では、堺出身の身御野島子と身御野鉄幹も寄稿しており、こうした文芸サロンに折口も若き折口は親しんだという。

⑤歌集と万葉研究

折口信夫は、子どもの頃から父親から百人一首や西行の歌や万葉集に親しんできた。研究として、後年「口訳万葉集」を著すが、「古代」の研究とともに、実作者として表現活動を試みた。若い頃から歌や俳句、釋超空として、アララギ派同人からやがて独立。「海やまのあはれ」春のことよれ「後(やまと)をくをな」などの歌集を出版。また、詩集には「古代恋愛集」「近代悲傷集」などがあり、近代文学にも道筋が深かった。

⑥芸能論と「翁の発生」

女性に囲まれて暮らす、歌舞伎や文案、あるいは、にはか芝居を見て育った折口信夫は、幼い頃から芸能者に親しんだ。後年、芸能論も多数著し、「翁の発生」では芸能の起源などについて論じ、能楽の「翁」という演目を「まれびと」が芸能化したものだとして重要視した。

国立国会図書館デジタルコレクション

背景地図は「イロハ弓早わかり大坂市街新圖」1926(大正15)年。折口信夫の大阪在任時代には市電はまだ一部が開通。



★折口と司馬遼太郎の通学路

司馬は、折口の生家に近い当時の南区難波西神田町(現・浪速区草草)に生まれ、後に上町台地の上古中学を経て大阪外国語学校に通った(折口の母校。天王寺中学も大阪外国語学校も現在は現在の大阪国際交流センターの場所にあった)。地図中の赤色の点線は高橋俊郎氏が推定した折口と司馬の通学路の最短コース。司馬遼太郎も上町台地から見た夕景について書いている。「夕陽ヶ丘から見る夕陽は美しい。私は学校に通っていたころ、このあたりが好きでよく歩いた(中略)太陽が、大気のなを深くよび込んで沈んでゆくを見て、息を忘れるような思いがした。」(『大阪の原形』)



大阪国際交流センターに立つ、天王寺高等学校と大阪外国語大学の発祥の地標。同地には府立第五中学校(1897~1901)、天王寺中学校(1919)の、また大阪外国語学校(1921~49)、同大学(1979)の校舎があった。

折口学の世界

折口学の世界